〔研究ノート〕

寛文美人図の衣裳に注目して

去る４月３日から５月８日まで開催していた「開館50周年記念特別展Ⅰ女性像の系譜―松浦屏風から歌麿まで―」では、江戸時代初期から後期に至るまでの美人図が並び、美人図の時代による変遷や地域（京・江戸）による相違などをお楽しみ頂きました。美人図の魅力の一つに、華やかな衣裳の表現が挙げられます。ここでは特に寛文美人図の衣裳のデザインについて注目してみたいと思います。

江戸時代初期の美人図は群像表現が主でしたが、17世紀半ば頃から一幅に美人一人のみを描く作品が増え始めます。その多くは無背景の中に舞姿の美人を表しています。これらの一人立美人図は、主に寛文年間（1661～73）頃に描かれたと考えられることから、「寛文美人」の名で親しまれています。寛文美人図に描かれた美人の纏う小袖や打掛など一番上に重ねた着物に最もよく見られるのが、図１のように、地に小さな模様を散らし、両肩や裾下に大柄の模様（花・葉・円など）を置き、その内部を様々な幾何学文で埋めるものです。寛文年間には、小袖の様々な模様を収録した小袖雛形本が出版されるようになっており、そこからこの時期に流行したデザインを知ることができます。「寛文小袖」と呼ばれるこの時期の小袖は、左腰部分に大きな余白を残し、肩から右腰、裾へ大柄の模様を配したデザインが特徴的です（参考：図２）。着物の背面を見せる雛形本に対し、寛文美人図では着物の前面が見えるため、左腰部分に余白があるかは分かりにくいですが、大きな主模様を肩部に置くデザインは寛文小袖の特徴を備えていると言えるでしょう。ただ、寛文年間に出版された雛形本や現存する寛文小袖を見ると、肩から右腰、裾にかけて水流や橋、樹木などが大胆に連なる模様が多く見られ、様々な幾何学文で埋められた花や円を一つ一つ大きく表す寛文美人図の衣裳のデザインとぴったり一致するものはあまりありません。それにも関わらず、寛文美人図ではこのデザインがしばしば描かれており、美人図の図録などで取り上げられる寛文美人図を見ると、全体の４割ほどの作品において、このデザインの衣裳が描かれています。寛文小袖の大胆に連なる模様は背面を見せることができれば美しいですが、美人図では顔を見せるために体が正面を向いた姿勢が主に描かれ、衣裳の背面がほとんど描かれません。そのため、正面からでも美しい衣裳の模様が選ばれ、大柄の模様を肩、裾下などに置くデザインが好んで描かれたのではないでしょうか。

次に注目したい寛文美人図の衣裳は、墨絵で王朝風の人物が描かれたものです。図３は寛文美人図には珍しく印章のある作品で、「明形」印が画面右下に押されています。描かれた美人は白の小袖・赤の打掛・緑の帯と、コントラストの鮮やかな美しい衣裳を身に纏っています。小袖は雷文繋地に円形を散らしたもので、円の中には王朝風の男女が墨で描かています（図４）。同様に小袖に団扇形を散らし、内側に墨で人物や自然景が描かれた作品があり（図５）、団扇中の人物はやはり王朝風俗で表されています。寛文美人図の衣裳の中にいくつか見出すことができるこの墨絵の王朝風人物は、王朝物語を意識したものであると考えられます。墨絵で描かれた王朝物語についての記述が、井原西鶴の『好色一代男』（天和２年刊）にあり、そこには「男は本奥縞の時花出、女郎も衣裳つき洒落て、墨絵に源氏、紋取りも小さく並べて、袖口も黒く、裾も山道に取る」と記されています。墨絵で王朝物語を表した衣裳が、天和２年（1682）頃に流行りのお洒落であったことが分かります。また、元禄年間（1688～1704）頃に描かれた菱川師房の作品の美人に、墨絵の伊勢物語が描き込まれた色紙形を散らした小袖を纏ったものがあり、墨で表した王朝物語絵を用いた小袖デザインが少なくとも天和から元禄年間頃に好まれていたことが窺えます。なお、正徳年間（1711～1716）になると、墨絵のデザインを多く収載した雛形本が出版されるようになりますが、王朝物語よりも山水・花鳥などが多く取り上げられています。

江戸時代に入ると印刷技術が発達し、王朝物語の絵入り版本も多く刊行され、物語やその挿絵が身近なものとなったことが、墨絵で表された王朝物語が17世紀後期頃に衣裳デザインとして人気となった背景の一つとして考えられます。物語版本の挿絵はモノクロであり、また肉筆の物語絵においても、彩色を廃し墨線を基調とした白描（墨絵）の作例がこの頃に画帖や絵入り本において増える傾向にあります。こうした絵入り版本や白描の王朝物語絵の普及が、衣裳デザインにも何らかの刺激を与えたのではないかと思われます。

さて、寛文美人図に描かれた二種の衣裳デザインに注目してきましたが、顔貌や姿体の表現にも目を向けてみたいと思います。初めに取り上げた大柄模様の衣裳を纏う美人は、細い弓形の眉・上瞼の線が濃い目、中央が少し凹む下唇などが多くの作品に見られる特徴としてあげられます。それに対し、二番目に取り上げた墨絵の物語絵模様の衣裳を纏う美人は、目が大きめで顔や体の描写がやや硬化して人形のような情趣があるものが多いように感じられます。顔貌や姿形の類似する美人は類似する衣裳を着ていることが多いということは、ただ流行の衣裳デザインを絵に取り込むというだけでなく、工房などによって定まった衣裳デザインが受け継がれるという側面もあることを示しています。（図１・３は『女性像の系譜』大和文華館、2011年より、図２は『小袖模様雛形本集成1』学習研究社、1974年より、図４は『江戸の美人画』学習研究社、1982年より複写しました。　宮崎もも）

図１

図２

図３

図４

図５

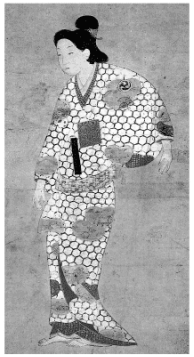

図１ 花籠美人図（部分）個人蔵　図２ 御ひなかた上（復刻本・原本は寛文７年刊）　図３ 立美人図（部分）個人蔵　４ 図３の拡大図　図５ 美人立姿図（部分）

季刊 美のたより No.175
平成23年8月2日
発行　大和文華館

Copyright ©2011 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.